

編集後記

「研究は、それが印刷発表されなければ価値がなく、切角の成果を眠らせるのは罪悪である」とは前学長の佐々学先生の言葉で、自らは原著論文 300編、総説 100編などを発表してこられたが、それは東大医科研機関誌 Japanese Journal of Experimental Medicine に負う所大であった。

本学医学会でも、当初から学会誌刊行が予定されながら、その是非について hot discussion があり、第 1 巻発行までに 9 年が経過してしまった。研究者が自分の労作を一流学会誌に投稿したいのは当然で、駄作中心になりがちな学内誌を作るのは紙の無駄使いだとする意見はもっともである。しかし、自らを顧りみて、一流学会誌に発表しなかった仕事が全て無駄とは思えないのである。情報化時代となって、JOIS の端末機を叩けば、学内誌であってもたちまちにして拾い上げてくれ、貴重な資料を手中にした経験もある。

いつも素晴らしい業績があげられるとは限らない。世の中には無駄なことが結構多い。論文でも然りだ。しかし、無価値と思われたものが後に素晴らしい業績として見直されることはしばしばある。成果を眠らせてしまえば、公費を無駄使いしたことになる。それに本学は研究者を育成していく所でもある。若い医学者が気軽に懇切丁寧な助言を受けられる学内誌のメリットは大きい。

駄でなく、独創性に富み広く引用されるキラリと光った論文を多数収録する雑誌を目指して努力していくことが、とりもなおさず医薬統合を目指す本学の大きな飛躍のための原動力となるものと期待される。本学医学会設立 10 周年の今、大学の新しい発展のため、原著中心の学会誌 Toyama Medical Journal が形づくられていくよう、エネルギーを前向きに結集していこうではありませんか——。

(上村 清)

編集委員

川崎 匡(委員長)

飯田 博行 高田 正信

上村 清 田澤 賢次

久世 照五